# ＪＳＲ編集委員会　議事録

日時：平成 25 年 4 月 27 日　7：00-8：30
会場：ラグナガーデンホテル　明海の間

出席者：平林 茂（理事）、川口 善治（委員長）、青田 洋一、赤澤 努、笠井 裕一、
寒竹 司、税田 和夫、千葉 一裕、二階堂 琢也、長谷 斉、長谷川 和宏
（以上委員出席者、11 名）
三輪様（ＣＢＲ）、尾島様（ＪＳＲ編集分室）、鈴木めぐみ（事務局）

**報告事項**

**１．事務所の変更（資料 1）**

委員、および出席者の自己紹介がなされた。

**２．広告の状況（資料 2）**

資料をもとに広告の収集状況の確認をした。

（川口委員長）本年も 10 月くらいに委員の担当を決めて各企業に依頼する予定であるが、上から順番に単純に割り振っただけなので、依頼しやすい企業等あればそれぞれ後日メール等で教えてほしい。

下記のような意見があった。

・昨年の担当から、基本的には担当は変えないほうがよいと思う。

・1 回でも協力（掲載）実績のある企業がリスト化されているが、関係性もまったくわからない企業もあり、依頼に困ったことがあった。2 回依頼しても申込がなかったらリストから削除するなどしたほうがよいのではないか。

平林理事と川口委員長でリストを整理し、委員へ報告することになった。

**３．論文投稿状況（資料 3）**

4/15 現在の論文投稿状況の資料を査収した。ＪＳＲ編集分室の尾島様より下記のような報告があった。

（尾島様）来年度の 9 号について、推薦論文執筆の依頼をしたので、これから多く投稿される予定。投稿され次第、委員各位には査読をお願いしたい。またこのたびの学術集会で評価の高かった演題についても推薦論文として投稿を促す予定。

**４．査読状況（資料 3）**

資料参照。

## ５．超過金支払い問題の顛末

昨日の理事会審議の結果について、平林理事から下記のような説明があった。

（平林理事）ＪＳＲ4-3 号における掲載ページの超過金について、学会本体（以下、ＪＳＳＲ）が負担するのか、学術集会（以下、主催校）が負担するのかについて、理事会で検討した。

事前審議の結果としては、ＪＳＳＲが負担する、主催校が負担するが半々といったところであったが、結果は双方が折半（半分ずつ負担する）ということで決着がついた。

「ＪＳＳＲが負担する」との意見の主旨は、超過金についてあらかじめ取り決めをしておかなかったのはＪＳＳＲの責任であり、またプログラム委員会の際、主催校の戸山会長が採択率を上げることについて明言していたが同席した委員（全員ＪＳＳＲ理事）からは反対がなかったなどの意見があった。

「主催校が負担する」との意見の主旨は、主催校が採択率を通常（60-70%）よりも上げた（80%）ことから頁数が超過したのであり、抄録号である 4-3 号については主催校が内容を決定しているため発行責任は主催校にある等の意見があった。

「双方折半」の案が採択された理由としては、超過金についての規程がなかったこと、また学術集会と学会本体との間のすみわけがあいまいであること、今回が学術集会が独立してプログラムを作成した最後の学術集会であったことなどであったとの説明があった。

## ６．英文Ｃａｓｅ　Ｒｅｐｏｒｔの投稿（資料 4）

平林理事と川口委員長より、英文Ｃａｓｅ　Ｒｅｐｏｒｔの投稿を促す文書を、4 月下旬に発刊された 4-4 号に同封し、また今回の学術集会会場で配布していることが説明された。

・（平林理事）英文でのＣａｓｅ　Ｒｅｐｏｒｔを採用する学会誌が少ないので、ＪＳＲに掲載しようということになり、上記のように会員へ告知している。しかし、まだ周知し切れていないので委員各位から若い先生がたに投稿を促してほしい。

・現状このような英文Ｃａｓｅ　Ｒｅｐｏｒｔの投稿はあるか？⇒（尾島様）ない。

・ＪＳＳＲ担当号だけでなく、関連学会（合同で雑誌を出している他の 6 団体）の特集号についても英文Ｃａｓｅ　Ｒｅｐｏｒｔの投稿は認められるか？

・基本的にＪＳＳＲが担当している 1・2・9 号についてである。しかし関連学会の号では認められないということではない。

・関連学会特集号についても、英文Ｃａｓｅ　Ｒｅｐｏｒｔの投稿を促してはどうか。

・せっかく英文で書くなら、インパクトファクターの付く雑誌に投稿したくなるのではないか？

・インパクトファクターはどのような雑誌につくものなのか？

・10 年以上英文で発行しているある学会の雑誌（査読も完全オンライン化している）で、やっと昨年インパクトファクターが付いたものがある。どのような理由で付いたか調べてみる。

**７．ＪＳＳＲ入会への勧誘の現状報告（資料 5）**

川口委員長が、ＪＳＳＲの昨年 3 月と今年 3 月、また 2 年前の同会員数の比較データを示した。

（川口委員長）今まではＪＳＳＲに所属していなくても関連学会に所属していれば、ＪＳＲ全号を送付していたが、今年度からＪＳＳＲに所属しない人には、所属している団体のものだけを送付するようになった。ＪＳＳＲに所属せず、関連学会のみに所属する人には入会を督促した結果、入会数が増加していた（もちろん単純な新入会もある）。これからもＪＳＳＲへの入会を促進したいが各関連学会の考えはどうか？

・「腰痛」と「西日本」では、医師でない会員が特に入会をしたがらない。理由は会費負担（15000 円）の問題である。

・（川口委員長）医師だけでもぜひ会員になってほしい。

・「側彎症」「インストルメント」「手術手技」・・・医師はほぼＪＳＳＲへも入会している。理学療法士などコメディカルは入会していない会員が多いかもしれないので調査する。

・「東海」・・・全体の会員数が 350 名程度で、150 名程度はＪＳＳＲへ入会している。多くが発表のために入っている。

・「西日本」・・・医師は入っているが、専門が違う会員はＪＳＳＲへは入会していないと思う。

・「腰痛」・・・850～860 名ほどの会員で、理学療法士がかなりの数を占めている。恐らく一番ＪＳＳＲへの入会数が少ないと思われる。雑誌全号をもらえるメリットよりも会費 15,000 円を支払わなければならないデメリットのほうが大きいと考える会員が多い。

・「内視鏡」・・・医師はほぼ全員入会していると思われる。

それぞれの団体について、どの程度が入会しているか、担当委員が確認することになった。

**８．第 4 巻進行予定表（資料 6）**

4 巻の進行について、資料 6 をもとに確認した。

（川口委員長）無料ページが 120 ページまで増えているので、号によって多少の厚さに違いは出ているが、そのメリットを生かしつつ作成を進めたい。

**９．第 4 巻 9 号　推薦論文特集号の件（資料 7）**

尾島様より資料 7 について下記の説明があった。

（尾島様）〇がついているのは、執筆承諾があった論文であり、×はお断りいただいたもの。空白となっているのは、現状未回答の論文である。

・推薦論文についても査読があるということは、明示されているか？⇒（尾島様）明示されている。

・というのも、推薦論文でリジェクトとなった投稿者からクレームがついたことがあった

ためであるが、推薦論文であってもどうしてもアクセプトできないものについては、学会誌の質を維持するためにも、リジェクトとなることがある。そのようなときにクレームを受けないためにも、推薦論文であってもリジェクトの可能性があることを示唆する必要があると思われた。
・著者にしっかり伝える（査読結果によってはリジェクトもありえること）ことも重要だが、学会誌の質を保つためにも、査読者に基本的に推薦論文については掲載の方向で査読してほしいが、論文の質次第ではリジェクトもありえることを、伝えたほうがよいと思う。
・上記の「推薦論文であっても場合によってはリジェクトとなる（リジェクトしてもよい）」件を、著者および査読者へ伝えることについて、分室の尾島様が了解した。

**１０．第 5 巻 2 号英文原著号の件（資料 8）**
資料 8 を参照しながら、川口委員長と尾島様から下記の説明があった。
（川口委員長）英文原著の投稿は少ないので、ＪＳＲ編集委員会から執筆について促す文書を送っている。現状 5 名から執筆承諾の返事があった。
（尾島様）4-2 号（ＪＳＳＲ担当の英文原著号）は掲載が 4、5 編と少なめだった。空いたスペースには通常の原著（日本語）を掲載している。

**審議事項**
**１．二重投稿の確認（資料 9）**
各学会でも問題になっている二重投稿について、資料 9 を参照しながらＣＢＲの三輪様も交えて討論した。
（川口委員長）ＪＳＲができたときの投稿規定によると、かなり類似する内容でも、言語の別（日本語・英語）があればアクセプトしていた。本年 8/3 に日本医学雑誌編集者会議総会がある予定なので、日本医学会の動きを見守り、その後検討する必要がある。
・現在までは、初版出版から一定の期間が経過したのち、初版の出版元から了解を得られれば類似している内容でも採用していたが、日本医学会の会員となった現在は、日本医学会の方針に従うのがよい。
（三輪様）まったく同じ図表の使用は避けたほうがよい。海外の出版元が版権を押さえている場合は多額（数十万円）の請求をされる場合がある。
（三輪様）二重投稿を調査する企業が存在している。自分が作成した図表を流用するにも注意したほうがよい。
・日本の雑誌でもＪＢＪＳとＪＳＲに、同時期に先輩と同じ図表を使って投稿したらリジェクトされたことがあった。
・国内では比較的「流用」については緩やかではないか？
（三輪様）現状国内では流用についてうるさく言っていないが、本来は国内であっても出版元からの正式な許可がなければ流用は許されない。

**２．オンライン化への審議**

これまでの経緯の説明：（平林理事）ＪＳＳＲが日本医学会へ入会するにあたり、毎月発刊される学会誌が必要との条件があったことから、7 学会が集まって雑誌を作ってきた経緯がある。しかし初年度の経費が 5000 万円もかかってしまい、今後の財政難が懸念された。そこでワーキンググループを作り、千葉先生が中心となって費用等の比較検討がされていた。費用については紙で作成し続けるより、オンラインにしたほうが経費削減できることがこのときの調査でわかっている。しかし予想以上に広告が集まったことや、その後は 5000 万円もかからずに発行できるようになったこと、事務局の混乱等から議題がペンディングとなり、今日に至った。

現在、関連７学会中 3 学会からもオンライン化してほしいとの要望書も届いている。

ここで事務局体制も一新されたことから、4/25 理事会でオンライン化については進めることが決定された。そして、ＪＳＲ編集委員会に再度の調査が依頼された。特に各関連学会の意向について、次回 5/23 の理事会までに調査することを急務として託されている。

（川口委員長）5/10 までに各学会の担当委員は、各学会の意向をまとめて川口委員長宛に報告してほしい。

以上について全員が了解した。

・どうしても紙がほしいという会員もいるため、オンラインにも紙ベースの学会誌を必要とする人にも両方に対応できるような方策が必要と考える。

・紙媒体学会誌が必要な人には、オンラインのみの人よりも会費を高くするなども検討してはどうか。

・厚い抄録を学会場で持ち歩くのが大変困難との意見がある。確かに今回の抄録は大変重く、他学会のようにｉpad などで見られるようになっていれば、便利と感じる。

また、三輪様よりオンライン化についてはＣＢＲではすでに対応できる体制が整っており、どのような（一部紙で、一部オンライン等）対応も可能との発言があった。

各学会からの要望：主に経費の面で、オンライン化が要望されている。個人会費が格安な団体もあり、150 万円の経緯を捻出し続けると、あと数年で財政破綻してしまうとの意見もあった。

詳細は、各担当委員が調査し、回答を上記日程までに川口委員長へ報告することになった。

**その他**

・別刷納品時に、請求書のみが送付されているが、納品書もほしい。⇒（三輪様）了解した。

以上